



『トクシマ・アンツアイガー』

第2巻

第20号

徳島 1916年2月6日

在外ドイツ人（2）

オランダは純粋なドイツ人、つまりフランケン人、ザクセン人、フリース人を起源とする民族からなる国であって、この国は1648年までドイツ帝国¹に属していた。残念ながら、言語的にオランダは独自の道を辿った。それは宗教改革後に生じたドイツでの言語統一に加わらず、今日なおオランダで話されている低地ドイツ語を維持したからである。その国の全人口は、およそ600万人に達している。オランダはこの戦争では中立であるが、もちろんイギリスの影響を強く受けているように思われる。たとえば、オランダ貿易の大部分はイギリスの直接的監督下にある。

オランダ国民の大多数は、ドイツ帝国に対してある種の嫌悪感を抱いている。そのことは、文化的にわれわれ帝国ドイツ人よりも上位にいると信

1 神聖ローマ帝国

じるオランダ人が抱く自惚れから、部分的にはあるが説明できる。他方では、帝国が小国オランダの独立とオランダの植民地財産を奪おうとしていると恐れる人がいる。それは、イギリスとフランスがあらゆる手段で意図的に抱き続け、感じている恐怖である。この見解が原因で、戦争の勃発に際し、インド²のオランダ植民地にいるドイツ人は、不快かつ不正な取り扱いを受けた。それに対し、次のようなこともまた認められねばならない。オランダ人の中には友人と見なしてよい人たちがいるし、すでに戦争以前に、帝国との新しい密接な結びつきのなかにオランダの安寧を見た人びとがいた。

おそらく全てのオランダ人の場合にも、最終的に血は水よりも濃いことが実証され、さらに彼らは自分たちの同胞民族の勝利を喜ぶに至ると思っ
てよいであろう。戦争後に両帝国の政治的地位がどうなるか、当然のこと
ながら知る由もない。しかし、その地位はわれわれにとって有利なものに
なるだろうことは確実に推測され得る。われわれの考えに従ってオランダ
経済をいっそう生き長らえさせるか、あるいは破綻させるあらゆる手段を
われわれは手に入れているのだ。オランダの貿易は、もっぱらライン川を
利用したドイツへの通過貿易である。ラインからエムデンに至る運河建設
の問題は、すでにしばしば熱心に論じられている。そして、そのような運
河があれば、われわれはドイツ国内のライン河口を手に入れることができ
ようし、また貿易をロッテルダムとアムステルダムからドラルト湾へ移し
変えることができる。

オランダの領土と関係し、ドイツ系民族が — 今日では、低ドイツ語を
話すフラマン人という名のもとに統一されている — ベルギーの北方地域
に住んでいる。他方、この国の南部には、ゲルマン人とラテン系人種の血
が混ざりあったワロン人が住んでいる。

ベルギーに住むフラマン人の数は、ワロン人よりも遙かに多い — 350
万人対 250 万人 — にもかかわらず、この国の公的生活は全くフランス的

2 東インド、つまり今日のインドネシアを指す。

特徴を持っている。否、ベルギーの学校ではフランス語だけが教えられた時代があった。そして、ワロン語が認められるまでに、長い戦いが必要であった。しかし、今日少なくとも上流階級と官吏は、ワロン語をフランスの管理下にある（フランス語より劣る）言語と見なしている。ベルギーはこの戦争でわれわれと戦っており、そのことによってフラマン人の政治的立場も歴然としている。戦争以前に、非常に多くのフラマン人の心情はドイツ的であり、したがって次のことを確実に期待してよかろう。戦争があったとしても、その国に再び平和が訪れる時、ベルギーの王冠のもとにいるドイツ系の人びとと、偉大なドイツ祖国に住むドイツ人との間には、より良い関係が再び打ち立てられるであろうことを。

1866 年まで北ドイツ連邦の一員であった小国ルクセンブルクは、ドイツ民族の視点から見ればやや特殊な役割を演じている。その住民は、数千人の移民フランス人を除いてドイツ系である。小国ルクセンブルクに見るような言語の混乱は、この世界にほぼ無二ともいえる。行政と裁判にはフランス語が使われ、高等学校はドイツ語とフランス語を教え、国民学校はドイツ語だけを教えている。さらに、ドイツの管理下にある鉄道で使われる言語はドイツ語であり、上級諸身分は、否ほとんど全ての国民はフランス的な考え方をしている。「ドイツ人ではあるがドイツ人たることを望まず、フランス人たることを望むがフランス人ではないルクセンブルク人は、哀れな役割を演じている。全ドイツ民族という帳簿のなかでルクセンブルクは無効な項目となっている。」—アインハルト著『ドイツ史』—

この国は 1869 年以降、中立を宣言している。ささやかな国土しかないため、政治的にこの国は何の役割も演じていない。だが、周知のように、その国は今やわれわれの前線の背後にあり、重要な兵站路はルクセンブルク王国を通り抜けている。戦争では避けることができないのだが、万一損傷や破壊が生じた場合、われわれは完全にルクセンブルク人に補償を約束する。さらに、われわれはそこの住民に対し、自分たちの国の住民同様に、食料を供給している。われわれのこの行為がなければ、ルクセンブルク国

民は恐らくとっくの昔に餓死したと思われる。

つづく

日本の神々と神話（２）

散歩の途中に、多くの者は石製の神の像に気がついた者もいるであろう。その台座には小石が寄せ集められ、子どもの玩具が掛けられた神の像に出会う。これが地蔵の像である。地蔵は人びとの罪を背負って地獄で苦しみ、仏教徒を現世で癒すのである。地蔵とイエスの名前の類似性は全く偶然である。地蔵は農作物の守り主であり、また雨の提供者である。何よりも子供の大きいな助け手である。死亡した子どもの魂は、全ての魂と同じく、三途の川を渡って黄泉の国へと旅立たねばならない。三途の川の向こうには大きな戸塚の婆が座っていて、子どもたちの服を脱がせ、川岸にある小石を運び集める終わりのない仕事を子どもたちに割り当てる。人びとは現世で地蔵の像のところに石を積み上げることによって、子どもたちのこの仕事を軽減できると信じている。死者の魂を裁く裁判官は閻魔大王である。彼は、大抵長い法服を着て、頭に縁のない平たい帽子を被った姿で描き出される。彼は、人間が在命中に行う非行を映す罪業鏡を見ている。そして、それらの非行は全て、彼の傍にいる従者たちによって忠実に書き留められる。哀れな魂が冥府へやって来ると、それは、甲斐甲斐しく働いている閻魔の部下である鬼の頭か馬の頭を持つ異形の者によって、大王の前に引摺り出される。罪業鏡と罪業車及び長い罪業リストが、その魂の運命をやがて決定する。従者たちは裁かれた魂を熱心につかみ、裁きを執行する。白のなかで突き碎かれる魂もあれば、石で挽かれて粉になる魂もある。あるいは、赤く燃えた鉗子で鋏まれ、茹でられ焼かれる魂もある。要するに、それらはありとあらゆる責め苦を負わなければならない。農作物の本来の創造主で保護者は宇賀の神、ないしは保食神であり、その有名な名前が稲

荷、すなわち稲生である。それは男性神とも、女性神とも呼ばれている。それは、神道の神であるため、絵で表わされることはない。しかし、神社にはその神の使者である狐の像がほぼ例外なくあるため、無学な農民たちは狐を神そのものとして敬っている。世間では、狐はありとあらゆる姿に変わることができ、農民たちにさまざまな悪戯をすることで得意になっていると広く信じられている。

づつく

図書室

われわれの図書館のために、久留米から次のような書物が到着した。

カール・シュメーリンク	『守護精霊と因果応報』
カール・シュメーリンク	『自由思想侯爵』
カール・シュメーリンク	『スペインの奸臣』
カール・ヴェーバー	『農奴』
G. フラトン	『コンスタンス・シャーウッド』

さらに、ベルリンの一般プロテスタント布教団体からの寄贈があった。それらの作品は以下の通りである。

ヘルマン・バンク	『ティネ』
ヘルマン・バンク	『奇矯な短編小説』
グスタフ・ヴィート	『悪の権化のカルスバート旅行』
J.P. ヤコブセン	『六冊の短編小説』（短編小説 6 編）
J.N. ポタペンコ	『物語りとスケッチ』
ゲストゥール・パローン	『北極圏からの 3 つの短編小説』
フィリップ・シュタイン	『ビスマルクの演説』
ガブリエレ・ロイター	『女の心』
ワルター・ブレーム	『魅惑的なゲーム』

ジョルジュ・オーネ	『小屋の持ち主』（三巻）
ジョルジュ・オーネ	『クロワ・モールの貴婦人』
オットマール・エンキング	『P.C. ベーム家』
パウル・ハイペ	『マイル』
マックス・ガイスラー	『主の揺籃』
オーダ・フォン・ゲルドルフ	『ゲルダ・ゲロヴィンス』
M.S. ヘーゲラー	『三つの御伽噺』
グスタフ・アフ・イエイエルスタム	『トーラ』
セルマ・ラーゲルレーヴ	『大農場の歴史』

カバレット・ミモザ

先週の日曜日に開催されたカバレット「ミモザ」の第二回公演は、第一回と比べあらゆる点で進歩を遂げていた。第一回の夕べも素晴らしい演技を披露してくれたが、にもかかわらずわれわれはそのことを確認することができる。とまれ、先週の公演の夕べはとても素晴らしかったとの言葉が、このことを一番良く言い表している。

広範囲に及んでいるプログラムの一つ一つを取り上げる必要はないだろう。ただわれわれは、カバレット天国に新しいスターが誕生したことだけを報告したい。われわれは1年以上ここで一緒に生活しているが、それにもかかわらず、全体の熱心な監督であるルフはいろんな新しい人材を発掘し、それに重要な光 ―フットライト― を当てることに成功した。とりわけ、ピラスは美しく力強いテノールでもって、自分のカバレットが別名『カルーソー』と呼ばれることの正当性を十分に証明した。『バンジョー・セレナーデ』の演奏に際して、彼は、農場主の娘役でこの上なく着飾って演技したカンパツティークから最高の支援を受けた。第二番目の新たな魅力を提供したのが、チロル・ダンスと合唱団の歌であった。そのメンバーは、

Fl. ケラー、ブロンネル、シルト、そしてローレンツであり、彼らのシュナーダー・ヒュッpfフェル³と靴踊りは、当然のことながら喝采を浴びた。その他の出演者は、「カバレットの達人」としての名声をすでに確立していたが、新たな演技によってさらなる榮譽を獲得した。その音楽が、今度は女性バンド⁴によって演奏された。ボランティアの消防隊は心を込めて大広間を飾ってくれた。

要するに、今回も完璧な成功で、次回の公演へ大きな期待を新たにするものであった。

収容所展望

そうだ、収容所の出来事についての週間ニュース記事だが、確かにそう呼んでもよい。なぜなら、アットホームなものを感じないからこそ収容ホームなどと呼んでいる、この収容所のできごとを扱うこういった週刊ニュースは、そもそも書くネタがごく僅かしかない。そこでは、多くのことが起きるだろうか？さて、さて、われわれは世界ではないにしても、われわれのための小さな自治体を作り、そのなかで小さな出来事が大きな出来事の意味を獲得している。次のようなことも、つまりは出来事であったのだ。すなわち、日曜日にシラー牧師殿がわれわれのところへやって来て、心に響く説教をしたのだった。そこで、われわれは自己を内省し、「自分を見つめる」ことになった。礼拝参加者が身に付けている日常とは全く懸け離れた祝祭の衣装のため、最初から祭日らしい雰囲気があり、礼拝が終わった後も日曜日だということを実感した。世俗的な側面から見れば、夕方開かれた演戯は、日曜日の雰囲気を維持するのに大いに役立った。その卓越した成果は、誰もが認めるところがある。今は1年のうちでもっとも乾燥した時期なので、収容所の消防隊は比較的多く出動しなければならなかつ

3 (アルプス山中の) 即席の歌

4 むろん女装したのである

た。ところで、消防隊は、即興劇用の歌詞を書くことだけを要請され、それ以外自己の技倆を示す機会を持たなかったのも、そのことに対して不満だったそうである。— 今、体操協会は、非常に必要とされる組織だった肉体的な訓練のために心を砕いている。そう、われわれには格段にそれが必要であるが、全く訓練から離れている。そして、平行棒の練習を見れば、最高の体操選手の場合でさえも、彼らに備わっている大いなる確実性と機敏さが衰えてしまっていることが見て取れた。根気強い熱意によって大いなる進歩が遂げられたのであり、多くの者はトップの体操選手に成長したがつているように見える。たとえ皆が皆、トップ選手になれる素質を持っていないにせよ、最初の頃の僅かな筋肉痛や親指の捻挫で怯んではならない。建設工事中の仕事場は、有用な仕事に就くチャンスを与えることになる。その道具が、今週、支援委員会から届いた。我らのいとしい豚は仕事場に場所を明け渡さねばならなかった。負けるが勝ちだと考えたのだろう。その世話係りは、自分が育てている豚がいなくなって寂しくなり、再び似たような興味あることをしようと今は常々計画を立てている。彼のお気に入りの運命からして、その世話係が収容所のソーセージ工場で雇ってもらおうと考えたとしても、私は別に驚きはしない。だが、信じ難いことだが、この間の夜、海軍兵曹たちが自分の部屋で猫狩りをしたのは食糧不足からであったとは信じられない。雄猫めがけてあれこれと物を投げつけるのだが、全て投げ損じて当たらなかった。だが、それが原因で雄猫は底知れない不安に襲われ、いてもたってもいられなくなった。そこで、その猫は障子を突き破り、虐待者の手から逃れた。で、私は今日もまた一緒にサッカーの試合に行こうと思ったのだが、丁度昼寝に入ろうとしたときにはいつも、スポーツマンたちはもう出発するという。だからといって、私は昼寝をあきらめろとは言われたくない。われわれは天候について不満を述べることはできない。毎日毎日太陽は輝き、有名な古老の話しによれば、今年はここ数年の中で最も暖い冬らしい。だが不運なことに、よりもよって文章を書かねばならない今日、氷のように冷たい北風が吹いて、指がすっ

かり^{かじか}悴んでしまっている。さらに、ネプケ、ヤコプ、ニワトリ、楽団、合唱団、新聞、犬、入浴について書きたいが、余りにも寒すぎる。火鉢の火が消えてしまった。消さないようにしたいのだが、そうすると書くことができない。来週はもっと暖かくなってほしい。その時に、再び僕はペンをとろう。

チェス・コーナー

(駒の略語 K=キング、D=クイーン、L=ビショップ、
S=ナイト、T=ルーク、B=ポーン)

第 83 問の解答

1. Kd7-c6. Kd4 など

2. Kc6-d5 詰み

1. 任意の手

2. Tか Dか Sで詰み

第 84 問の解答

1. Sd7-f8 e5-e4

2. Dg8-g5+ Kf4 x g5 あるいは

f6(h6) x g5

3. Sf8-e6 か g6 で詰み

1. Ta4xh5

2. Sf8-e6+ Kf4-e4

3. Dg8-a8 詰み

正解を送ってくれたのは、ヨーゼフ・ヴェーバーである。

第 85 問

白：Kb6, Db1, Tc8, Lh8, Sg4, Bc6, f5

黒：Kc4, La4, Sg2, Bd6

2手詰め

第 86 問

白：Ke1, Dh2, Le7, Bb2, c6, f6

黒：Ka4, Ba5, b4, b5, c7

3手詰め

イーリヒ映画会

日曜日の夜 8 時 20 分、大広間で上映。どうぞご覧下さい。

開催者

食肉販売業 ハナスキー

お奨め

レバーペースト、ブラッド・ソーセージ、メットヴルスト、ガーリック・ソーセージ、モルタデラ、酢漬けニシン、ニシンのフライ。

さらに、事前の予約が必要なのは、

チューブ入り練り歯みがき「プベコ」で 60 銭。

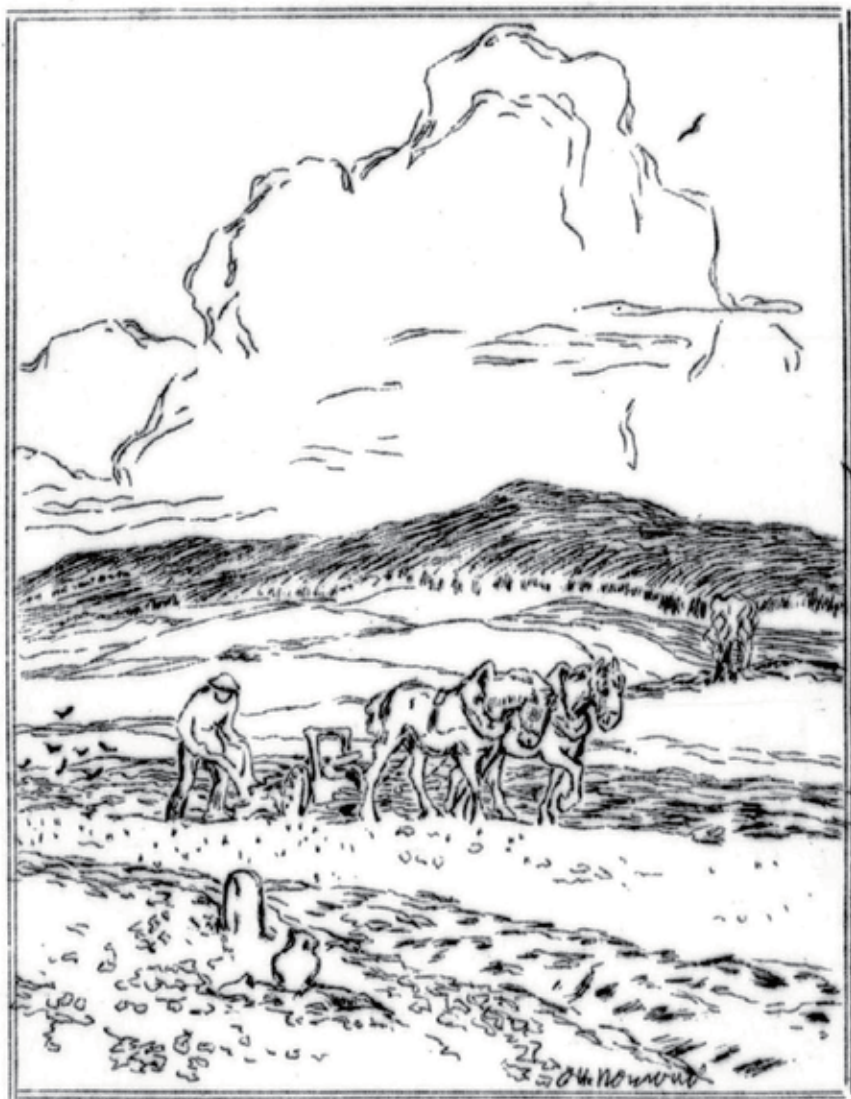
青島での苦難に満ちた日々から（2）

スクラップ同然の電線を通して、ある所轄官庁と結ばれている電話が真夜中に鳴り始めた。問い合わせると、堡壘への敵の突撃が 4・5 回あったが、全て撃退されたとのことだった。その日は多少静かに過ぎ、元気づける目的で私は二人の中国の知人を訪問した。女学校の本館はなおも被弾を受けたので、鞏の若旦那は非常に興奮していた。今、彼は青島からなんとか離れようとしたが、当然のことながら不可能だった。誰も負傷した人はいなかったの、私は彼を落ち着かせようとした。結局彼は、まだ完成していない章華（ジャンホア）の建物を宿にすることができた。彼は荷物をまとめて引っ越した。私は彼と彼の家族の者たちを運ぶため、私は一台の自動車を手に入れた。彼の引っ越し先は、何新柯のところだった。その人物は、自分の二台の自動車を中国赤十字社に自由に使わせていた。しかし、引っ

越したのは良くなかった。というのは、女学校にそれ以上の砲弾が命中することはなかったが、彼が新たに滞在した建物はこのところ激しく砲撃を受けたからである。そこで、彼は改めて不安になった。とうとう彼は良く効くと評判の鎮静剤に手を伸ばし、就寝した。そして、ベッドのここで包囲攻撃を無事に切り抜けた。これに対し、西の小高い丘の上にいる砲兵中隊の真後ろに住んでいたジョウシュウ島の家屋管理人である老魏は、全く落ち着き払っていた。「全ては運命だ。」と言って。彼は引っ越さなかった。そして、家は全く危害が加えられずに済んだ。他方、その隣の人々が去った呉乃安の家は、砲弾を受けてこなごなになった。近くの別の家屋管理人はずっとそこにいて、孟子を読んでいた。そこへ、榴弾が屋根を突き破って彼の傍に落ちたが、破裂しなかった。彼はそれを片手で掴みこう言った。「これはそれにしても熱い」。そして、彼は再び読書が続けたということだ。

砲兵中隊が西の小高い丘に配置されることを、私は病院で知った。大鮑島地区から人々がやって来て、是が非でも引っ越したいと言った。私は彼らを割り振った。学校に一部収容されている負傷者は全員病院へ移すこととし、看護婦と看護師には病院のなかの新しい建物の地下室に安全な宿泊場所がある。赤十字社の従業員は学校と居住用建物の一番安全な場所に泊まることになるが、出て行きたい者を引き留めはしない。

つづく



オットー・ウベローデ

農夫のいる風景

Beiblatt zum Tohushima Anzeiger.



何の役にも立たない協力者！

ミューレン＝シュルテにならって



主人は「気のきかない」田舎者を派遣した
その者はドイツ人を殴るよう言われていた

だが、田舎者は
田舎者は
しかも、帰宅



何の成果も挙げなかった
ドイツ人を殴らず
しなかった。

そこで、主人は二番目の田舎者を派遣した
その田舎者は最初の田舎者を助けるよう言われていた
二番目の田舎者も、官報によれば
同じくドイツ人を殴らず
そして、また帰宅もしなかった。

そこで、主人は三番目の田舎者を派遣した
その田舎者は前の二人を助けるよう言われていた
三番目の田舎者はよぼよぼの老人で



かろうじて出発できたので
笑い物になったが
これもまた帰宅しなかった。

そこで、主人は四番目の田舎者を派遣した

その田舎者は前の三人を助けるよう言われていた

その田舎者は

そのため、

その上、帰宅



抵抗に会い

急いでかの土地を去り

しなかった。

そこで、主人は五番目の田舎者を派遣した

その者は前の四人を助けるよう言われていた

その田舎者はリスボンにいて

どうしたものかと思案し

そして、自分の住まいに留まった。



そこで、主人は六番目の
田舎者を派遣した

その者は前の五人を手伝う
よう言われていた

六番目の田舎者はあちこち捜したが

途中でいろいろな災難に遭い

さんざん殴られただけだった

彼はどのように手伝ってよいのかわからず

またもや帰宅しなかった。

そこで、主人はひどく心配して考えた
私は今、どこから田舎者を手に



入れようか

どの土地で、どの場所で。

他の者が先へ進むのを助けた田舎者は

誰一人いなかった

任務を遂行した田舎者は誰一人

いなかった

われわれの家にせめて勝利の報を届けた田舎者も誰一人いなかった

それなのに、いったい

田舎者はどうしてまだ

必要だろうか？

何のために？ なにしろ



私がぶん殴られ、

それも私が一人で招き

よせたのだ

だから、私はどんな田舎者ももはや必要ない！